

## 廣安博之・工学部教授

日本人として三人目の受賞

# 本田宗一郎メダルを受賞

工学部原動機工学講座

西田

恵哉

本学工学部の廣安博之教授が米国機械学会から本田宗一郎メダルを授与された。自動車や二輪車用の内燃機関に関する国際的な教育、研究、学会活動への貢献が評価されての受賞である。このメダルと廣安博之教授の研究プロフィールを紹介する。

## タキシード姿での受賞式

本学工学部第一類（機械系）原動機工学講座の廣安博之教授は、一九九二年十一月十一日、米国アナハイム市（ロサンゼルス市郊外）のホテル、アナハイム・ヒルトン・アンド・タワーズで開催された米国機械学会（会員数十一万八千人の米国有数の学会、日本最大の学会である日本機械学会（会員数四万五千人の兄弟学会）の一九九二年の年次総会で、ジョセフ・ファルコン学会長から、本田宗一郎メダル（The Soichiro Honda Medal）を授与された。受賞式では会長はもちろん受賞者も全員タキシード姿（写真一）で、夫人同伴での出席であった。

## 本田宗一郎メダルとは

本田宗一郎メダル（写真二）は直径七十mm厚さ四mmの十四金製で、本田技研工業㈱の創業者、故・本田宗一郎氏が一九八三年（昭和五八年）に米国機械学会に一〇万ドルを寄付して創設されたものである。一九八四年以来、乗用車や二輪車など個人的交通手段の分野に貢献した人物に対して、毎年一人に送られている。

今回の受賞理由は米国機械学会によると、「工学関係の学生教育への貢献、自動車・二輪車用内燃機関の燃焼現象に関する研究への貢献、工学分野での国際的学会活動への多大な貢献に対して」（著者訳、原文は



写真1 世界各国からの、他の賞やメダルの受賞者と共に、タキシード姿で記念撮影（前列中央が廣安博之教授）

「For contributions to the education of engineering students, to the understanding of combustion in engines used for personal transportation, and for numerous international contributions to the engineering profession）」となっている。

これまでの受賞者には、ロータリーエンジンの発明者のフェリックス・バンケル博士（一九八七年）、ディーゼルエンジンの燃焼研究で世界的に有名なオーストリアのAVL研究所会長のハンス・リスト博士（一九九一年）などがおられる。また日本人では古浜庄一・武蔵工業大学学長（一九八五年）、大東俊一・京都大学名誉教授（一九八九年）がお



写真2 本田宗一郎メダル(右)と受賞楯(左)  
メダルのレリーフは初代シビックとスーパーカブ

られ、廣安博之教授は日本人として三人目の受賞者である。

## 東京オリンピックの年に米国へ

廣安教授は広島県福山市の出身で、福山誠之館高校から東北大学工学部に生まれ、東北大学大学院の博士課程を修了された。

ただちにトヨタ自動車㈱の研究機関である(株)豊田中央研究所に入社されたが、東京オリンピックが開催された年である一九六四年(昭和三十九年)から二年間、米国ウィスコンシン州マジンソン市にあるウィスコンシン大学工学部機械工学科のフィル・マイヤー教授(後に米国自動車技術会・会長)とオットー・ウエハラ教授の内燃機関研究室に派遣された。ウィスコンシン大学で実施されていた研究プロジェクトのお金で、客員研究員として雇われたわけである。日本人としては初めての採用であった。

## ウィスコンシン大学 内燃機関研究室

ウィスコンシン大学は当時から現在に至るまで、米国における内燃機関研究のメッカである。廣安教授の派遣後、多くの日本人の内燃機関研究者がウィスコンシン大学の内燃機関研究室に留学、滞在するようになり、米国の進んだ研究手法を身につけた。これが、その後の日本の内燃機関研究の発展を支えたとも言える。

廣安教授が派遣された時は、ディーゼル機関内の燃料噴霧の粒径測定に関する研究プロジェクトが行われようとしていたが、なかなかうまくいっていなかった。廣安教授は東北大学大学院での研究で既に噴霧の粒径測定を行っていたため、その技術を生かし、米国人

の博士課程の学生と共に実験に取り組まれた。そして、米国人学生の博士学位のための研究を實質的に指導され、この分野で米国におけるパイオニア的な研究業績を残された。

また、この時の研究室の滞在を通じて、現在、内燃機関研究の分野で世界的に指導的立場にある研究者との交流の芽を育てられた。これが、今回の本田宗一郎メダル受賞につながる、国際的研究、教育活動の第一歩であった。

## その後の米国、欧州、 アジアでの国際活動

二年間のウィスコンシン大学客員研究員の後、豊田中央研究所に戻られ、その後一九六八年に広島大学工学部機械工学科に赴任され、現在に至っておられる。その間一貫して内燃機関、特にディーゼル機関の燃焼解析と燃焼排出物発生メカニズム解明に関する教育、研究に従事されるとともに、米国の他、英国、エジプト、イスラエル、インド、インドネシア、中国、台湾、韓国などの学生の教育、研究者との交流に取り組まれた。これらの国の大学での招待講義、国際学会での招待講演など数多い。一九七七年には米国デトロイト市にあるウェイんステイト大学に客員教授として一年間勤務、一九八八年から米国自動車技術会のフェローを、また一九九二年には中国上海交通大学の顧問教授に就任されている。